

やまんばと桶屋

おけや

むかし、あるところに、桶屋がいて、山で竹を切つては、それで桶を作つてくらしていました。ある日のこと、桶屋は、いつものように山へ竹を切りにいきました。たき火のそばで桶を作つていると、山のおくから、やまんばがあらわれて、ものもいわずに火にあたりました。

桶屋は、心のなかで、

（やまんばが來たぞ。こいつはたいへんだ）と思いました。すると、やまんばが、「おまえ、『やまんばが來たぞ。こいつはたいへんだ』と思つているな」といいました。桶屋は、（このやまんば、どうやつてしまつしてやろうか）と思いました。するとやまんばが、

「おまえ、『このやまんば、どうやつてしまつしてやろうか』と思つているな」といいました。

桶屋はあわてました。

（こいつはたいへんだ。おれの思つてることがみなやまんばに分かるみたいだぞ）
すると、やまんばが、

「おまえ、『こいつはたいへんだ。おれの思つてることがみな分かるみたいだぞ』と思つているな」といいました。

桶屋はこわくなつて、だまつて桶のたがを作りつけました。

しばらくして、火にあぶつていた竹を持ちあげたひょうしに、竹がぱちんとはじけて、やまんばのほうへとびました。

「あちちちち」

やまんばは、びっくりしてにげました。そして、

「人間ちゅうもんは、考へていなないことまでやるもんだ。これだから人間はゆだんできない」といいながら、山おくへ帰つていきました。

それからは、やまんばは、めつたに人には近よらなくなつたということです。

おしまい。

原話..「旅と伝説第4年第4月(40)」三元社刊

再話..村上郁